
名探偵と大怪盗。

美可

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵と大怪盗。

【Nコード】

N1410B

【作者名】

美可

【あらすじ】

ある日、キッドの現場に足を運んでいたコナン。久々に逢うキッドにコナンは組織に乗り込む事を伝え、キッドと手を組む事に！？

どこかのビルの屋上に、盗んだ宝石を片手に呟く白い泥棒　怪盗
キッドが居た。

「今回もハズレか…。いつになったら見付かるんだ、パンドラは…」
今回もビッグジュエルとなる宝石を盗み、パンドラを探していたが、
どうやらまたハズレらしい。

パンドラ。

その宝石は不老不死の効果があり、それを使った者は若さを保つた
まま、ずっと何千年も生きて居られるという不気味な宝石である。

かつて、初代怪盗キッドがパンドラを狙う何らかの組織に殺られた
事を知って以来、初代の仇を取る為に二代目はパンドラを探してい
たのだった。

「……、パンドラなんてホントに存在するのかよ……」

屋上のフェンスに肘を付け、ハアと、深い溜め息を付いた。

その時、屋上のドアがキィと音を立てて開いた。

キッドはゆっくりと振り返るとそこに居たのは小さな少年だった。

「これはこれは、名探偵。」

「よお、キッド。久々だな」

「そう、ですね。貴方とは暫くお逢いしていませんでしたね。どう
かされたんですか？」

「別にどうもこうもねえけど……実はな」

青い服を着た少年 江戸川コナン は少々躊躇いがちに話を持ち出した。

「……実は、近々組織を潰す計画をしてたんだ。奴らの情報が大部分集まったからな」

組織と言う名にキッドは、大きく反応した。

宝石を盗んでいる内に何度か逢った事があるコナン。

組織の存在を調べている最中に、この少年も自分が探しているのと同じ組織だと知った。

「組織に……？その小さな体で立ち向かうのですか？」

「いや、組織に侵入する時は元の体だ。もう少しで完成するって言うってたからな」

コナンは腕を組み、入り口に寄り掛りながらキッドを見上げた。

「……名探偵。その話、私が目的を果たすまで待つて頂けませんか……？」

「お前の目的は、パンドラだろ。組織とは関係ない筈だが」

「関係は有りますよ。初代怪盗キッドは以前、貴方が追っている組織に殺されたんですから」

「……！？」

衝撃的な事実を打ち明けるキッド。

そんなキッドに組織と関係している事を知らなかったコナンは、当たり前のように驚いた。

キッドの事を色々調べてはいたのだが、そこまでは調べ切れていなかったのだ。

「成程な。それでお前はパンドラを探し求めていたって訳か」

「そうです」

「……分かった。もう少し待ってやる。その代わり、お前の正体、ちゃんと教えるよ?」

「良いでしょう。パンドラが見付ければ、どちらにしろ、怪盗キッドは廃業ですし」

キッドはそう言うと、シルクハットとモノクルを外した。

その素顔はまだ高校生くらいの少年で、工藤新一とそっくりだった。

「これが、キッドの素顔ですよ、名探偵。満足して頂けましたか?」

「お前……俺と似てるのな」

初めて見たキッドの素顔に正直な感想を述べるコナン。

これほどまでに、似ているとは思っていなかったのだろう。

「良く言われます。……さて、長居のし過ぎだ。そろそろ退散させて頂きます」

にっこり笑って応えると、キッドは再びシルクハットとモノクルを付け直し、フェンスの上に立った。

「おう。俺も、気が向いたら手伝ってやるよ、パンドラ探し」

「ありがとございます。では、ご好意に甘えさせて貰いましょう」

コナンの言葉に有り難く承諾する。

「それでは」

「ああ」

キッドは一礼すると、お得意のハンググライダーで飛び立って行った。

その後を確認して、コナンも蘭が待つ家へと足を運ぶ。

そして、数週間後。

コナンの協力も有って、見事パンドラを見付だした二人。その頃にはコナンも工藤新一の姿に戻っていた。

「やっとここまで来たな」

工藤邸のリビングで、三人は集まってこれからの事について話合っていた。

「そうね。でも、貴方たち、本当に良いの？死ぬかもしれないのよ。不安そうに二人を見つめる哀。

彼女は完成した薬を飲まず、小さくなったままの姿で生きる決意をした。

また一からやり直すのだと、哀は新一に薬を渡した時にそう伝えたらしい。

「今更、何言ってるんだ。ここまで来たら後には引けねえよ。奴らに殺される様なヘマはしないさ」

「新一の言う通り。何も心配しなくて大丈夫。哀ちゃんは、俺たちの帰りを待ってる？」

哀の心配をよそに、二人は笑って言った。

「絶対死んじや駄目よ。必ず戻って着なさい」

「了解!!」

こうして、二人は工藤邸を後にし、組織のアジトへと向かって行った。

その後ろ姿を見つめていた哀はただ、彼等が無事に帰って来るのを祈っていた。

．．．Fin．．．

(後書き)

皆様、初めまして。美可はるかと申します。

とりあえず……。

中途半端な終りかたしてごめんなさい！！文才なくてごめんなさい

(< | >)

話の内容、全く分かりませんよね (^ | ^ ;)

キッドとコナンが手を組んで組織に乗り込む話を書きたかったんですが、肝心の組織のシーンがない。

これは後々書かせて頂こうかと。中身まで詳しく書くと長くなりそうなので、とりあえずプロローグっぽい感じで書かせて頂きました。長編となると、中々難しくて書けないんですよ。でも、頑張ってます！！

ではでは。後書きも中途半端ですが、この辺で。

感想、お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1410b/>

名探偵と大怪盗。

2011年10月3日11時54分発行